第 199回森で遊ぶ会（宝永火口）実施報告書

1. 実施日時：令和 5 年8月21日(月） 11:00～14:30(現地)

2. 実施場所：富士山宝永火口

3. 担当：佐野、大石

アシスタント会員：青野、小久保、小嶋、小長井、杉山

4. 一般会員の参加： 合計22名

5. 実施状況

昨年企画したが、悪天候により中止になったため、今回再企画した。この時期、インバウンドの増加による海外からの登山者で混雑が予想されたが、富士山五合目富士宮口は思った程には混雑していなかった。しかし、登山道ですれ違う人は、ほとんどが訪日外国人だった。

西臼塚駐車場から富士山五合目駐車場までの間、バス車内で「富士山」に関する講話を行った。標高が上がるとともに森が変わっていく様子を車窓から眺めてもらいながら、富士山の成り立ちや、登山の歴史、気象、高山植物が少ない理由等を解説し、富士山への理解を深めてもらった。

午前中は富士宮口五合目駐車場から六合目小屋を経由し、宝永第一火口縁までの間を観察した。森林限界に生きる植物を観察しながら、森が形成されていく様子や、過酷な環境下で巧みに生きる植物達の術を理解してもらった。昼食は第一火口底を予定していたが、霧が発生して視界が悪くなってきたので、第一火口縁で摂った。少し経つと霧が消えて火口全景を観ることができたので、火口の成り立ちを説明した。

午後は第一火口縁に沿って下り、宝永遊歩道を駐車場に向けて観察を続けた。樹木類が多かったので、主な樹種の特徴を触覚や嗅覚を使って解説し、樹種の違いを知ってもらった。今回、8月下旬の開催だったので、キベリタテハの発生時期とも重なり、植物観察しながら、多くの成虫を観ることができた。また、五合目駐車場付近では、タイアザミに訪花するクジャクチョウも観ることができた。蝶の観察には恵まれた会であった。

観察は3班に分かれて実施したので、その様子を班ごとに報告してもらった。

＜1班＞（担当：小久保、小長井）

ご夫婦と女性 4人、男性1人の計7人を案内した。大半の方はリピータだが、ご夫婦の男性の方は初参加だった。また宝永火口は初めてという方が半分以上だった。今回の主な目的は、富士山の森林限界を歩いて火山荒原特有の植物と亜高山帯森林の植物を見てもらう事、そして火山荒原に樹木が育って行くまでの植生の遷移を見てもらうことだ。

富士宮口五合目の登山口から六合目を経由、宝永第二火口縁までのコースでは、樹林帯を抜けた森林限界付近の植物を中心に観察した。ここでは植生の遷移の初期段階として、イタドリ、オンタデ、ミヤマオトコヨモギ、コタヌキランなどがパッチを形成していることがよく分かる。これらを見てもらいながら、次のような植生の遷移を説明した。①これらのパッチは徐々に大きくなり、やがて中心部の地下茎が密集し過ぎて呼吸困難になり地上部が枯死、②それにより土壌は富栄養になり、イワオウギやヤハズヒゴタイなど他の草本が侵入、③最後にはカラマツなどの木本が侵入して、パッチを構成していた草本が駆逐される。実際の遷移の様子は、眼下のカラマツ林とその上方に点々と広がる草本類のパッチを見比べることにより、皆さんにも確認していただいた。

ここならではの自然を見てもらう事も、また大事なポイントだった。富士山は氷河期を経験していない若い山のため、ハイマツの代わりにカラマツが優先していること、そのカラマツやダケカンバが深い雪と強風に耐えるため背丈も抑え身を捩って、しかしたくましく生きていること、火山荒原には根粒菌と共生するマメ科やハンノキ属の植物が先ず生えてくる事などだ。また富士山固有のフジハタザオや希少種のイワツメクサも見ていただいた。どちらも地味な植物だが。火口縁から五合目へ戻るコースでは、森林限界付近の樹林帯の植物を観察していただいた。シラビソ

の森では独特のカラメル香がかすかに匂い、「あ、ホントにいい匂いがする！」という声も上がった。樹々を見ながら、樹木の垂直分布についてモミ属やツガ属、それにシラカバとダケカンバなどを例に挙げて解説した。また、ここの樹林帯では亜高山ならではの野鳥、特にメボソムシクイやルリビタキとの出会いが多い。しかし今回、残念ながらそれらの囀りはあまり聞こえなかった。ただ野鳥に詳しい参加者の1人が、地鳴きをしながら枝に止まった雌のルリビタキを双眼鏡で確認、皆さんに教えてくれた。今回は、前回に続いて植物以外に野鳥や蝶も見ていただこうという趣旨もあったのだが、野鳥についてはイワヒバリやホシガラスとも出会えずちょっと残念だった。一方で蝶については、アサギマダラ、キベリタテハ、クジャクチョウをしっかりと観察することができ、皆さんの期待に応えられたようだ。

（小長井　記）

＜2班＞（担当：杉山、大石）

曇り空で直射日光が当たらない標高 2400mの現地は,下界とは異なり暑さに困らずに過ごすことが出来た。5合目の上り口ではヒメシャジンがきれいに咲いていた。イワオウギ、タイツリオウギも咲いており、実の形で両者の違いを説明した。上りの途中でカラマツの旗型樹形、火山荒原でのパッチの仕組や発達の仕方、フジハタザオやミヤマオトコヨモギの多数のひげ根について、またオンタデの長い根の絶えず変化している斜面への適応について話した。鮮やかな赤色の実をつけたコケモモが見られた。ムラサキモメンヅルがきれいに咲いており、マメ科として自ら窒素を取り込みやせ地でも対応できることを伝えた。

宝永第一火口縁に到着したところで霧が晴れ、鮮やかな宝永山が姿を現した。皆さんカメラのシャッターを切っていた。しかし、参加者の一人の靴の底が剥がれ始めているのが見つかった。幸い、小久保インストラクターが結束バンドを持っていたので、それを使って応急処置をすることが出来、その後の急斜面～ゴツゴツした岩場の道を無事に通過することが出来た。

樹林帯に入り、そこでの樹木～草花の観察をした。拡大鏡でシラビソとトウヒの葉を観察し、毛の有無を確認した。また、シラビソのヤニ袋の役割を話し独特の匂いを嗅いだ。ナナマドカマドの炭としての活用、ミヤマハンノキの落葉の森林再生への貢献を説明した。黄色で互いに似たような「ミヤマキリンソウ」と「キオン」が沢山咲いていたが、皆さん違いをわかってくれたようだった。途中で時々「アサギマダラ」、「キベリタテハ」、「クジャクチョウ」に出くわしたが、駐車中のバスの横の草花に止まっていた「クジャクチョウ」を、皆でじっくり見ることが出来た。

（大石　記）

＜3班＞（担当：小嶋、青野、佐野）

3班は9名で、いつも参加してくださる顔なじみの皆さんだった。狭い遊歩道上でガイドすることは、登山客の通行を妨げることになるので、インストラクター3人が一定の距離を保ちながら、それぞれがガイドした。

今回は草花や樹木だけではなく、鳥や蝶も観察してもらった。観察開始後、オンタデ、イタドリ、ミヤマオトコヨモギ、コタヌキラン、ヤハズヒゴダイ等の草花や、ミヤマハンノキ、カラマツ、ミヤマヤナギ等が次から次に出てきた。観察に時間をとられてしまい、前の班が見えなくなってしまったので急いで追いつこうとすると、キベリタテハやアサギマダラが上空を通過し、また観察に時間をとられてしまった。やっと前の班に追いついたので、「パッチ」について説明した。長い年月をかけながら森が形成されていく様子やカラマツの風衝樹形なども見てもらって、植物達が過酷な環境下で一生懸命に生きていることを知ってもらった。

六合目の山小屋で休憩した後、観察を続けながら宝永火口に向かった。コケモモ、コバノイチヤクソウがあった。コケモモの実は、少しだけ赤く色づいていた。山頂方向を見ると、七合目、八合目の小屋が見えた。少し雲はかかっていたものの、真っ青な青空が見えてすばらしい景色であった。同じマメ科植物のタイツリオウギ、イワオウギ、ムラサキモメンヅルの3種が並んで生えていたので、違いを説明しながらじっくりと観察してもらった。

こうして歩いているうちに宝永第一火口縁に到着した。下の火口底に下りるか下りないかで迷ったが、霧がかかっていたので下りずに火口縁で昼食をとることにした。しばらくすると、霧が消え、火口全体が見えてきた。そこへアサギマダラが山頂の方から降りてきて、火口縁に沿って舞って行った。こうしたドラマチックな景色を見ながら、素晴らしい一時を過ごすことができた。

昼食後は森の中の遊歩道を五合目駐車場に向けて観察を続けた。コバノイチヤクソウ、ヤマホタルブクロ、トモエ

シオガマ、キオン等の草花やダケカンバ、シラビソ、トウヒ、コメツガ、ナナカマドなどの樹木を観察した。野鳥についてもメボソムシクイを声だけでなく、その姿でも観察できた。駐車場に戻るとクジャクチョウ2頭がタイアザミの花に止まり吸蜜していたので、じっくりと観察してもらった。名に相応しい、色鮮やかな姿に感動したようだった。今回は草花や樹木だけでなく、この場所でこの時期だけに観察できる蝶にも会えた。いつもと少し違った森で遊ぶ会であったが、参加者にも満足していただけたようだった。

（佐野　記）

写真で振り返る「森で遊ぶ会（宝永火口）」

観察開始　スタート地点は大渋滞

パッチについて解説しながら六合目に向かう

六合目小屋から宝永火口を目指す

カラマツの風衝樹形について解説

コケモモの実は少し赤くなっていた

急に霧が出てきたので、第一火口縁で昼食

霧が少しずつ消えてきた

宝永第一火口と赤岩が見えてきた 絶景だ!

樹林帯の宝永遊歩道を歩きながら観察を続ける

鯛に似た実が特徴的なタイツリオウギ

イタドリの花で吸蜜しているキベリタテハ

クジャクチョウもタイアザミの蜜を吸っていた

以上（報告まとめ： 佐野）